

建築分野における女性の研究者・建築家をはじめ広く実務者の育成に携わった長年の貢献

終身正会員 小川信子君

小川信子君は 1955 年以來 43 年間という長きにわたって、母校日本女子大学家政学部住居研究室において女子学生の建築教育に携わっており、直接卒論指導した学生は 600 名を超えるという。卒業生は日本全国から海外まで広がり、研究者、教育者、建築家、芸術家、技術者、公務員、さらには地域のまちづくりを支える一市民として、それぞれの持ち場で建築に関わる実務を行っている。もとより、大学教師は誰でも学生に建築教育を行っており、女子大学の教員として当然とはいえ、教えた学生のすべてが女性であり、期間が昭和 30 年から平成 10 年までという時代背景を考えると、建築界における女子教育に特別の貢献をしたと言える。

建築社会は伝統的には男性中心の世界であり、戦前はもとより昭和 30、40 年代まで、実務分野で働く女性は極めて少数であった。しかし今日、設計、施工、研究などあらゆる分野で女性が活躍するようになってきた。対等とは言えないまでも、建築世界では、もはや「女性」という冠は不要となっており、他産業分野に比して著しい特徴を示している。「教育賞（教育業績）」は今回から本会内の特定機関（支部、調査研究委員会）推薦となったが、各特定機関から推薦された、それぞれに立派な教育業績のある方々の中からまず同君が選定されたのは、選考委員の多くがこのような変化を経験的に実感しているためと思われる。

同君は上記のように我が国の建築界に対して多くの女性実務者を育成したという教育貢献に加えて、本人もまた男性中心の建築社会で研究者・設計者として、長年にわたって誠実に実績を積み重ねてきた。研究分野では住居学を基盤に、子どもの生活と住まいを中心として、単に住居だけでなく保育施設、児童施設、学校、公民館など広くその範囲を広げ、建築と福祉を融合させた生活福祉の重要性を提唱してきた。設計面では、子どもや働く女性の立場を考慮した、数多くの優れた保育所・幼稚園の基本計画・実施設計を行い、我が国の幼児施設設計の基礎を築いてきた。このような研究者・設計者としての実績はそれ自体も素晴らしいものだが、教育賞という視点にたてば、同君の存在そのものが、現在建築分野で働いている数多くの後輩女性達に対するロール・モデルとなっている。その意味では、同君は男性中心の戦後の建築社会の中で、苦勞しつつ実績を積んできた同世代女性先達の代表とも言えるだろう。

また、学会活動の面では、家政学会理事、生活学会の会長を務め、本会においては初の女性理事に就任し、その活躍によって以降女性理事の増強が図られるようになった。建築計画委員会や大学教育小委員会の委員、ハンデキャプト小委員会の主査も務め、後進の女性研究者・教育者の育成に努めた。社会活動の面では建設省、文部省、東京都ほか数多くの審議会、審査会等の委員を務め、現在も UIFA JAPON（国際女流建築家会議日本支部）の会長として女性の立場から建築界の発展のために多くの提言を行っている。よって、ここに日本建築学会教育賞（教育業績）を贈るものである。